

Photo Essay

わかやま百景



(右)串本ダイビングパーク前ビーチに広がるクシハダミドリイシ群落。岸辺からすぐそばの水深3m前後にこんな景観が広がっている。
(左)どちらかといえば温帯に適合したチョウチョウウオの一種だが、これほどの数が固まるようすは串本以外では見たことがない。



Masakazu Akagi
1960年生まれ。大阪芸術大学写真学科卒。研究室賞並びにサイカイ特殊カメラ工業賞受賞。現在は写真学科講師も務める。第15回ダイビングワールドフォトコンテスト、第1回横浜国際水中映像祭特別賞など受賞多数。2007年、和歌山県串本町大使に任命。08年～2010年、トルコ軍艦エルトゥール号引き揚げプロジェクトに公式メンバーとして参加。著者に「渚のスローフード」、「だいこんダイバー」など。
公式ホームページ
<http://akagi.image.coocan.jp/>

(写真・文 赤木正和)

を形成しているが、さらに種類が増え、より広範囲の周辺海域に生息域を広げている。沖縄県ではサンゴの死滅が問題になっているが、ここ串本のサンゴ群落は台風によられてもすぐに回復する力強さを持っている。これは人間の生活排水など沿岸開発、環境変化とも密接な関係があるようだ。
「黒潮」をライフワークとして撮ろうと決めたのが三〇歳の時。それまでは海外の海に惹かれていたがこの日本の海の面白さにハマってしまった。和歌山の海には二〇年近く通うことになっている。でもいまだに知られざる世界が毎回潜るたびに発見できるのだ。和歌山沿岸の「黒潮」とのお付き合い、まだまだ続きそうな気がしている。

太平洋を北上する「黒潮」は本州沿岸海域に大きな影響を与えている。この「黒潮」は幅約五十五キロメートル深さ一キロメートルにも及ぶ巨大な海に流れる川で、毎秒三千万トンから六千万トンもの温暖な、より南方の海水を運んでくる世界最大級の強流だ。本州最南端の和歌山県串本町は本州でもっともこの黒潮の影響を色濃く受けている。この海は数年から十数年サイクルで大きく蛇行することが知られており、ここ数十年は和歌山に接岸傾向にあった。そのため沿岸の海域がより亜熱帯化し水中生物層も大きく変わってきたようだ。鯖浦と呼ばれる串本の海中公園地区は広く亜熱帯性のサンゴ群落

黒潮の海・串本町